

漢文訓読史研究の課題と構想

小林芳規

一、漢文訓読史の把え方

漢文訓読史という時、広義と狭義の二様の把え方がある。

広義の漢文訓読史とは、漢文訓読に係り過去の言語事象に触れたものは総て史的研究所の対象とする把え方である。抑も訓点資料は過去の言語の所産であるから、個々の訓点資料の解説や考察は無論、その紹介、或いは仮名字体やヲコト点などの表記の研究まで、皆これに入ることになる。

これに対して、狭義の漢文訓読史は、「訓読法の変遷」を直接の課題とするものである。広義の考察の中にも事象の変遷に言及したのもあるが、訓読法の変遷を正面に据えて考察したものが狭義の立場である。

本稿は、この狭義の立場における、訓読法の変遷を考察しようとするものである。

訓読法の変遷を問題とすると、先ずはその全体像がまだ叙述されていないことに気付く。その目で従来の訓点資料の研究を顧みると、解明すべき幾つかの課題が見えて来る。それらを大きく五つに分けてみることにする。

二、漢文訓読史研究の課題

漢文訓読史研究の課題の第一は、訓読法の体系が構築されていない

ことである。訓読法の変遷を叙述する方法としては、個々の訓点資料の訓読法の記述が基礎となりそれを積み重ね、異なった時代のそれを比較することが考えられる。その変遷に与る主要な事象は文法であり、日本語では助詞・助動詞や活用等がこれを担い、古典中国語では、助字・虚字類がこれを主に担っている。今まで、特定の訓点資料の記述には、全文の訓下し文を作り、それに基づいて訓読語を組織的に説くに当り、文法事象については日本語の古典文法の枠によつて来た。その結果、原漢文の文法事象を担う助字・虚字については、別立てをして、「特殊な漢字の用法」(1)とか、「訓法の概要」(2)等の項目を設けて、古典文法の枠と二本立てで説いている。

日本語の古典文法は、本来平安時代の平仮名の和歌・和文の用語を対象資料として組立てられたものであるから、訓下し文自体は日本語文ではあるが、漢文訓読の対象となる古典中国語文の助字・虚字が漏れてしまうのは当然のことである。漢文訓読文が古典中国語文を日本語で読み解いたものである以上、漢文訓読文に即した文法体系の構築が必要である。

その訓読法体系に拠つて、各時代の訓点資料の訓読法を記述し、それらを相互に比較し、時の推移を軸とする変遷を説くことを以て、史的叙述の方法とすることが考えられる。

第二の課題は、ヲコト点の分類が訓読法と如何に係るかということ

とである。ヲコト点の研究は、訓点資料研究の中で大きな位置を占めて来た。日本のヲコト点は平安時代初期から発達展開する。その実態を現存する訓点資料を博捜し考察して、中田祝夫博士が大成(3)させ、次いで築島裕博士が完成(4)に近づけた。中田祝夫博士はヲコト点を分類して、星点を基に第一群点から第八群点の八群とし、起源の一元説に立ってそれらの相互の関係を説いて、体系論を述べ、各群の時代的先後をも明らかにすると共に、各ヲコト点の使用者と宗派・学統との関連を説いた。これを承けて、築島裕博士は、点図集所載の二十六種のうち、名称のみあつて使用例の無いとされた十三種、実態があつて名称の無い三種について、殆どを確認し、素性を探つて命名すると共に、ヲコト点と宗派・学統との関係について、中田説を補強し、時代を溯らせたり、確かなものにしたりした上で、それらを仏教教学との関連で把え、訓点資料の国語史上への位置付けを行つてゐる。

この符号としてのヲコト点の研究が、それによつて訓読された言語の、訓読法の変遷と如何に係るかが新しい課題である。例えば、ヲコト点法の違いは訓読法の違いになるのか、同じヲコト点の資料でも訓読法に違いがあるのかどうか、又、或る宗派で使つていたヲコト点が他の宗派に影響した場合に、訓読法まで影響するのかわどうか、等を訓読史の上から明らかにする必要がある。

第三の課題は、宗派・学統による訓読法の諸系統を、訓読法の変遷という視点から見据えることである。宗派・学統による訓読法の系統の研究は、訓読語研究の近時に至るまでの数十年間の主要な趨勢となつてゐる。同文の漢籍が博士家の各家によつて訓読法を異にすることの指摘(5)が切掛けとなつて、同文の仏書の宗派・流派に

よる訓読法の異なりの所謂系統研究(6)に及び、最近も、天台宗・真言宗の密教の儀軌の訓法を主する成書(7)も公刊されている。

仏書の宗派・流派による訓読法の異なりを示す主要な事象は、訓読法の新古の差である。例えば、或る宗派の訓読法に助詞「イ」が用いられたり、並列の連詞「及」をオヨビと訓まずに不説としたり、添詞「者」の人を表す用法を「モノ」でなく「ヒト」と訓んだりする事象が見られ、これらの訓法が平安初期の訓点資料の訓法と同じである所から古用が見られるとし、他の宗派には「及」「者」という新しい訓法が見られるのと訓読法の系統を異にするとする。これらの事象が新古を語るものであることを、平安初期から平安中期を過渡として、平安後期・院政期における各宗派・流派にわたつて実証する必要がある。更に、これら以外に新古を示す事象がどれだけあるのかを調べ視野に入れて、それらを漢文訓読史の上に位置付けることによつて、初めて総合的に新古を語る証しとなり得る。

同文仏書の訓読法を宗派・流派別に比較する時、必ずしも変遷に係らない格助詞・接続助詞等の異同も挙つて来る。それらを変遷であるか否か選り分けるためには、訓読法の変遷による新古の事象を認定する座標軸を定めておくことが肝要となる。

第四の課題は、訓読法の変遷の全体像を明らかにすることである。訓読法の変遷の考察は、先ず、構文の文法的機能を担う特定の助字・虚字を個別的に取上げることから始まつた。「當」「須」と二度読みする再読字の再読訓法の成立を取上げたのがその最初(8)で、「及」「則」「耳」や「況」の呼応語の統一等が取上げられ(9)、一方、門前正彦氏も「者(ヒトよりモノへ)」「并(ナ

ラビニの訓」等を法華經古点を資料として論じた¹⁰。しかし、個々の事象を積み重ねるだけでは、事象の数が幾ら増しても全体像は見えて来ない。

そこで、次に同文經典で平安初期と院政期との異なる時期にそれぞれを訓読した二資料の訓読文の全文を比較することが試みられた(11)。同文の同一箇所を漢字に加えられた訓読法を逐一比較して異同を調べ、これを類別して変遷の類型を求めた。特定の助字・虚字の個別的考察で知られた諸事象は、それぞれの類型に納まることも分つて来た。ここで取扱つた經典は、偶々二つの時期の加點本が伝存する、大唐三藏玄奘法師表啓・金剛般若經集驗記・大唐西域記・觀彌勒上生兜率天經贊であり、いずれも同じ変遷の類型を示していることが知られた。しかし、比較に用いた個々の經典は、その用語が經本文の内容によつて制約されるから、共通する用語がある一方で用語使用には差異が生ずる。訓読法の諸事象の総てを一經典だけで説き尽すことは出来ない。このために經典の内容とその用語に配慮して比較するための訓点資料を選ぶ必要があるが、実際には現存する資料の制約から探し出すことは難しく、仮にそのようにして經典の種類と数を増やしても、訓読史の全体像を解明したことになる。

そこで第三の方法として考えられるのが、先に第一の課題で述べた訓読法の体系を構築し、これによつて個々の訓点資料の訓読法を記述した所を踏まえて、同一の時代における体系を描きつつ、時代別、資料別に配慮して、変遷を叙述することが考えられる。その作業を通して変遷の原理を見出し、この原理を以て、訓読語体系とそ

れに基づく史的叙述の良否を照射し直すことが望まれる。

抑も、中田祝夫博士のヲコト点の研究は、単に表記の符号の問題に止まらず、訓点資料の研究がそれまでの個別的な調査考察の段階から総合的把握の段階に発展し、個々の訓点資料の位置付けも出来るようになった所に大きな意味があるが、更に重要なことは、訓点資料の言語が独自の位相を持ち、それ自体に新たな研究の価値を認めたことである。従つて、訓点資料研究の目的も、従来の国語史研究を新しい資料を以て補いそれに寄与するという副次的な立場から、訓読語それ自体を解明することに意義があるとした。この新たな価値の方向に沿つて、築島裕博士は平安時代の訓読語の語彙・語法を平安時代の和文語と比較することによつてその体系を記述し、漢文訓読語という位相を浮彫りにした。中心とした資料は院政期十二世紀の南都系の興福寺本大慈恩寺三藏法師伝古点と源氏物語との比較であるが、国語史研究が時代別に記述する方法で進む中において、平安時代の言語を、それまでは一つの言語体系として漠然と見ていたのに対して、女流文学に用いた和文語と、漢文訓読に用いた訓読語とに分析して把え、それぞれを独立した言語体系として見据えて、漢文訓読語の考察を通して平安時代語を複層的に解明したもので、以後の文体研究に基礎を与えたことは周知の所である。

築島博士の研究を、訓読語についての共時的研究所するならば、訓読法の変遷の全体像を明らかにすることは、漢文訓読語を解明するもう一つの方法として必要である。

最後に、第五の課題として、日本の訓点と訓読法の起源を問題とすることが挙げられる。凡そ、歴史を説くには、その始まりが問われる。今日までの訓点研究は日本の訓点資料の発掘と考察に力点が

置かれた。膨大な資料がそれに応えた。最近、東アジアにおける漢字文化圏の諸民族の訓読を視野に入れて日本の訓点資料を相対化して見ることによって、日本の訓点と訓読法の起源を考えようとする動きがある(12)。それには、角筆による加点が東アジア漢字文化圏に共通の方法であったことが知られ、起源の問題も、そこに解決の緒があると考えられるが、ここではこの課題には言及しないことにする。ただ、極最近、新羅語を角筆で加点した華嚴経が発見されて(13)、この課題の有力な資料が見出されるに至っている。

三、漢文訓読史研究の構想

以上の諸課題のうち、第一から第四の四つの課題について、漢文訓読史を叙述するための構想を述べることにする。ここでは、それぞれの一端を取上げて説くに止める。

1. 訓読法体系の構築

課題の第一の訓読法の体系の構築については、漢文訓読文が古典中国語の文章を当時の日本語で読解いたものであるから、古典中国語の文法を加味した一つの文法体系が作られなければならない。

中国では、近代以前は「助字弁略」(一七二一年序)や「経傳釈詞」(一七九八年序)のような助字・虚字を主とする考察であったが、「馬氏文通」(一八九八年)以降は西洋文法模倣とその反省を経て、中国語に即した文法体系が記述されるようになり、近年は「史記」や「世説新語」など特定の時代の特定文献を対象とした文法体系の記述が行われるようになり、日本でも、藤堂明保「漢文概説」(一九六一年)、太田辰夫「古典中国語文法」(一九六四年)、牛島徳次「漢

語文法論」(古代篇・一九六七年、中古篇・一九七一年)等の成果があり、仏典についても、金岡照光「仏教漢文の読み方」(一九七八年)や伊藤丈「仏教漢文入門」(一九九五年)があるが共に漢訳仏典の特徴的な語法を中心にして訓みは現代の訓法に従っていて、平安時代の訓点資料の訓読法は対象とされていない。

これらを参考として(14)、「詞」を中心とする漢文訓読語の品詞分類を、妙法蓮華経八卷二十八品を対象資料として、私案として示したのが「図一」(次頁上段)であり、その中の「連詞」の下位分類を「図二」に示した。

(1) 詞を主とする漢文訓読語の品詞分類——妙法蓮華経八卷二十

八品を資料に

「図二」 附属詞の「連詞」の下位分類

a. 種々の成分となる連詞

連体修飾 …… 之

並列 …… 及 與 并 若 乃至 亦

選択 …… 若

b. 主に述語を接続してその関係を示す連詞

接続 …… 而 以 然 且

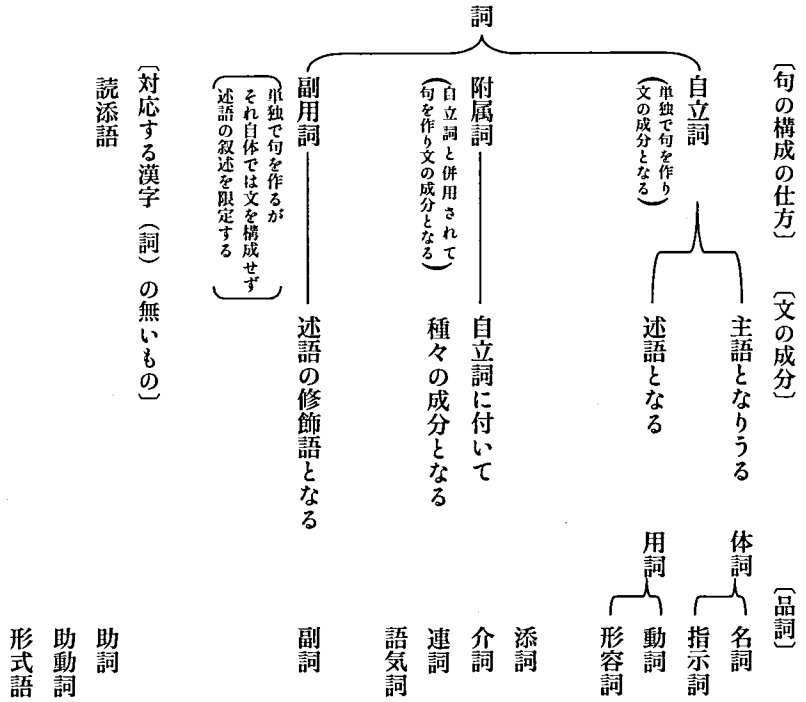
条件 …… 則・則便

因果 …… 故・以故 是以 是故

添加 …… 况

c. 叙述句の句頭に在って後の句の条件を示す連詞

假設 …… 假設・假使 正使 雖 若 如



このように分類することによって、漢文訓読史の叙述に新しい視点を得られる。中国語の「詞」は、同じ字でも句の中の働きによって品詞や機能を異にする。例えば、【図二】には「若」が並列と選択と假設との三つに分類されている。「並列」の用法は『助字弁略』に「與若義竝通也」、『古代漢語虚詞通釋』に「表示并列。可译為“和

”等」とあるので知られる。その訓法が訓読法の変遷に係って来る。即ち、並列の「若」が、平安初期には不説であったのに、假設の「若」の訓の影響によって、「若」の訓法に変わることが分つて来る。具体例によって示す。

② 「若」を例として見た訓読法の変遷

① 並列の連詞「若」——不説

聲聞〔若〕菩薩聞 我所説法 乃至一偈 皆成

佛無疑（山田本妙法蓮華經方便品平安初期点168行）

〔若〕晝〔若〕夜 於 此經王所有句義 觀察思量 安樂 〔而〕住

（西大寺本金光明最勝王經卷八古点71行）

〔若〕見〔若〕聞 作 是思惟（西大寺本金光明最勝王經卷五古点279行）

古点279行）

佛子住 此地 則是佛受用常在 〔於〕其中 經行〔若〕坐臥

（唐招提寺藏妙法蓮華經卷六平安初期点119行）

〔若〕心亂 者得 本心 〔若〕衣無者得 衣服（西大寺本金光明最勝王經卷一古点133行）

勝王經卷一古点133行）

連詞「若」は、假設の用法では「モシ」の訓が平安初期の資料から見られるが、並列の用法については、平安初期の特に前半期の資料では不説にして、假設とは訓み分けている。右掲の諸例の第一例は、「若」の前と後とに並列助詞「トト」を讀添えて「若」の並列の機能を表している。第二例では「若」の前と後とに助詞「モモ」

を讀添えている。第三例と第四例は叙述の並列であり、上の叙述を第三例は「若」見、第四例は「若」経行のように動詞の連用形の中立法で表している。第五例は「若」若くが二文を並列した構文に訓読した例で、前文を「得つ」で終止させている。第一例、第五例のいずれの場合も「若」には加点が無く、不読と見られる。並列の用法の「若」を不読とする平安初期の訓読法は、同じ並列の連詞「及」が平安初期の訓読法では不読であつて、前後に「ト」を讀添えたり、「モ」を讀添えたり、上の叙述を連用形の中立法に訓むのに通ずる。「及」の不読は次の諸例のようである。

〔参考〕並列の連詞「及」の不読

常離^ニ國王^ハ及^ニ國王王子大臣官長凶險戲者^ハ及^ニ旃陀羅外道梵

志^ハ亦不^ニ親近^ス（天理図書館藏注妙法蓮華經卷五平安初期点）

汝等天主^ハ及^ニ天衆應^ニ當供^ニ養此經王^ハ（地藏十輪經卷六元慶七

年点）

見^{タマヒテ}有^ニ讀誦^シ及^ニ受持^ス稱^シ歎^ス善哉^{ナリ}甚希有^{ナリ}（西大寺

本金光明最勝王經卷六古点40行）

これに対して、「若」の選択の用法では、「モシハ」の訓法が、主に平安初期の後半期から見られる。次のようである。「ハ」又は「シ」を加點して「モシハ」と訓んだと見られる。

② 選択の連詞「若」——モシハ

諸佛^ハ及^ニ聲聞佛子菩薩^ハ等^ハ若^ク獨^ク若^ク在^リ衆^中說^ス法悉皆

現^ル（唐招提寺藏妙法蓮華經卷六平安初期点339行）

若^シ長^ク中^有若^ク短^ク中^有若^ク共^中有^是不可得^{ナリ}（百論天安二
年点507・508・508行）

假設の「若」に宛てた「モシ」が、選択の「若」の訓に及んだことを示すが、その「モシハ」が更に不読だった並列の「若」にも扱がったことを次の例が示している。

③ 「モシハ」の訓が並列の連詞「若」の訓に扱がった例

勝境^ニ有^リ四^ノ謂^ハ制^多及^ニ比丘僧若^ク外天形像并^ニ與^ニ尊者^ト

（蘇悉地羯羅經略疏寬平八年奥書本卷二622行）

若^ク名^ハ若^ク義^ハ遍^ニ十法界^ニ別^ニ教辨^ス也（東大寺図書館藏法華文

句平安後期点二十オ2行）

並列の「若」の訓法は、平安初期の後半期から見え始め、天台宗・真言宗を中心に扱がって行く。

このように本来は意味・用法の異なりに応じて訓法も異なっていたものが、字を同じくするために同じ訓に読まれてしまう現象は他にも見られる。

例えば、願望を表す「唯願」が挙げられる。この二字は、今日「唯願ハクハ」と訓まれているが、願望を表す複合動詞であつて、「唯」は祈願の意の動詞である（15）。平安初期の訓読では原義によつて「唯願」と訓んでいる。次のようである。

① 「唯願」——「唯」は祈願を表す動詞

舍利弗重^ク白^ク佛言^ニ「世尊^ハ唯^ク願^ス說^ス之^ヲ」唯^ク願^ス

說^ス之^ヲ（山田本妙法蓮華經方便品平安初期点71行）

作^{シク}是言^の「唯見^{コフ}」哀^シ、愍^シ、益^シ、我^シ等^{タマハル}所^レ獻^ル宮^ノ、殿^ノ願^フ垂^ニ納^ル處^ニ（守屋本注妙法蓮華經化城喻品平安初期点）

第二例は、「唯」と「願」とを分けて用い、「唯」に「コフ」の訓を加点している。

所が、「唯願」の「唯」を「ウケタマハル」と訓んだ例が別に見られる。

② 「唯願」（「唯者敬諾之辭」妙法蓮華經玄贊卷六）

舍利弗重^ニ白^ク佛言^ニ「世尊唯願說^ニ」之^レ唯願說^ニ」之^レ（山田本妙法蓮華經方便品平安初期点 80 行）

（山田本妙法蓮華經方便品平安初期点 80 行）

白^ク佛言^ニ「世尊唯願爲說^ニ」於^テ甚深理修行^ニ」之^レ法^ヲ（西大寺本金光明最勝王經卷五古点 210 行）

唯願尊者・暫住^ニ於此^ニ（石山寺藏虛空藏求聞持法應和頌点 63 行）

動詞「唯」には折願を表す用法とは別に、応諾の意を表す用法もある。唐の慈恩大師基撰の妙法蓮華經玄贊卷六に右掲のように「敬諾之辭」（16）と説いている。

舍利弗言^ニ「唯然^ニ」世尊^{（略）}」（山田本妙法蓮華經方便品平安初期点 97 行）

（初期点 97 行）

の「唯」がこの用法であり、その訓として「ウケタマハル」と訓んだと見られる。右掲の②「唯願」の第三例は「唯願」と全訓を加点している。第一例は「唯願」、第二例は

「唯願」と訓んだと見られる（17）。このように「唯願」の「唯」を「ウケタマハル」「ウケタマハリ」と訓むのは、「唯願」が願望を表す複合動詞である原義からすれば誤読であるが、字を同じくするために応諾の用法の訓が流用されたものである。

更に、願望の「唯願」を「タマシネガフ」と訓んだ例も見られる。

③ 「唯願」（「唯、專辭也猶云獨也」助字辨略卷一）

唯願世尊哀^シ、愍^シ、我^シ等^{タマハル}廣爲分別^ニ（西大寺本金光明最勝王經卷一古点 272 行）

（西大寺本金光明最勝王經卷一古点 272 行）

各作^{シク}是言^の「唯願世尊・轉^ニ於法・輪^ニ」（守屋本注妙法蓮華經化城喻品平安初期点）

（守屋本注妙法蓮華經化城喻品平安初期点）

世尊大慈^ニ悲^シ唯願垂^ニ納^ル受^ル」（同右）

守屋本注妙法蓮華經化城喻品平安初期点では、「唯」と「願」とを分けて「唯」を「コフ」と訓んだ（①第二例）のと同じ構文を、

作^{シク}是言^の「唯見^シ、哀^シ、愍^シ、益^シ、我^シ等^{タマハル}所^レ獻^ル宮殿願^フ垂^ニ納^ル處^ニ」（同右）

のように「唯」と訓んでしまっている。これは「唯」字が動詞の他に、「助字弁略」に説くように「專字」「獨」の意の用法があり、その訓が願望の複合動詞「唯願」の「唯」の訓に流用されたものであり、原義からすれば誤読である。

「唯願」の訓法は、「願フ」が「願ハクハ」に変遷するのに連動して、「唯願」と変り、これが平安中期を過渡として、一般的な訓法となる。平安中期に「唯願」と訓んだ虚空藏求聞持法の石山寺蔵本と同一箇所を、平安後期・院政期の諸点本では、天台宗・

真言宗の各宗派とも次のように一様に「唯願タケシカハクハ」と訓んでいる。

〔天台宗延暦寺系〕

唯願タケシカハクハ尊者暫シタマヘト・住コ、ニ 於此コ、ニ（東寺觀智院金剛藏長元八年（一〇

三五）点、仁快本（相実の流）

〔天台宗三井寺系〕

唯願シ、コ、ハ尊者暫シタマヘト・住シタマヘト 於此コ、ニ（東寺觀智院金剛藏應徳三年（一

〇八六）点、乗々房より奉受）

〔真言宗仁和寺系〕

唯願シ、コ、ハ尊者暫シタマヘト 於此コ、ニ（仁和寺藏延久元年（一〇六九）点、

円堂点）

唯願シ、コ、ハ尊者暫シタマヘト 於此コ、ニ（仁和寺藏寛治六年（一〇九二）

点、快禪受、円堂点）

〔真言宗小野流〕

唯願シ、コ、ハ尊者暫シタマヘト 於此コ、ニ（高山寺藏永治二年（一一四二）證印書

写、中院僧正点）

諸宗派を通じて、この訓法に統一されたことが知られる。これが今日の訓法となっている。

「唯」のように、祈願と応諾と限定という異なった意味・用法に
応じて曾ては「コフ」「ウケタマハル」「タダシ」と訓み分けていた
ものが、「唯願」の「唯」の訓法に象徴されるように、字が同じであ
る所から、「タダシ」の訓に統一され、その結果として原義が捨象さ
れてしまう事象は、他にも少なからず見られて、訓詁法が変遷する

原動力の一つとなっている。

2. ナコト点の分類と訓詁法の変遷との関係

課題の第二のナコト点の分類が訓詁法と如何に係るかについては、その全貌をここで説くことは出来ない。その一例を、真言宗仁和寺で用いられた円堂点と浄光房点とを取上げてみることにする。円堂点がナコト点の中でも盛んに使用された一つであり、真言宗の仁和寺系統の広沢流を中心に発達したこと、又、浄光房点は浄光房頼尊が用い、仁和寺中心に使用したことについては、中田祝夫博士・築島裕博士の指摘された所である（18）。

〔真言宗仁和寺における円堂点と浄光房点〕

① 使役「令」の訓詁法

円堂点と浄光房点の訓詁法を比べると、共通する点が少なくないが、相違点も認められる。例えば、使役の「令」の訓詁法を比べると、円堂点が「令シテ」と再読表現にしているのに対して、浄光房点は「令シムラシテ」と訓んでいる。次のようである。

○円堂点 —— 「令シテ」（再読表現）

〔快禪〕 即令シテ 内外一切シテ 清淨シテ（仁和寺藏虚空藏菩薩求

聞持法寛治六年点）

〔奥書〕 寛治六年十一月廿四日快禪阿闍梨受了

〔寛意〕 令シテ 杓シテ 却シテ 至シテ 物上シテ 訶聲方シテ 絶シテ（仁和寺藏金剛頂

瑜伽護摩儀軌寛治四年点

〔奥書〕寛治三年極月十八日於仁和寺喜多院書寫了

(朱書)「同四年三月十日僧都奉受已了」(19)

〔兼意〕^{オホシ}欲^{シメ}令^{ヒト} 佛法^セ 久^{シク} 住^ス世間^ニ (高山寺藏聖閻曼)

德迦威怒王立成大神驗念誦法仁平二年点

〔奥書〕仁平二年六月巳時許書寫了

成蓮房(20) (兼意)阿闍梨御房/奉受了

〔寛助〕^(シテ)令^セ 約^ク 却^{カヘシテ} 至^ル物上^ニ 訶聲方^ノ 絶^ス (仁和寺藏金剛頂)

瑜伽護摩儀軌康和五年点

〔奥書〕康和五年正月五日於烏羽御壇所奉受了/僧實寛(21)

〔經範〕^{シテ}欲^{ナリ} 令^セ 佛法^ヲ 久^ク 住^ス世間^ニ (仁和寺藏燄漫德迦)

念誦法天喜元年点

〔奥書〕(朱書)(見返)「天喜元年十月九日始點」(朱書)「求法沙

門經範之本」

○淨光房点——「令^{シム}ラシテ」

〔頼尊の流〕^シ損^ニ害^ヲ有情^ヲ 惚^シ持誦者^ヲ 令^ヒ心^ヲ 散亂^ス (東寺觀智院)

金剛藏蘇磨呼童子請問經永久元年点

〔奥書〕(卷上)永久元年九月十八日書畢 愚僧成祐

(朱書)「同十二月十四日點了」(追筆)「天永二年春

之比奉受了」

○成祐は隆勝の受法で、隆勝は保延七年に頼尊の訓誥法を

書写し伝えている(東寺觀智院金剛藏大日經廣大儀軌延
文元年奥書)

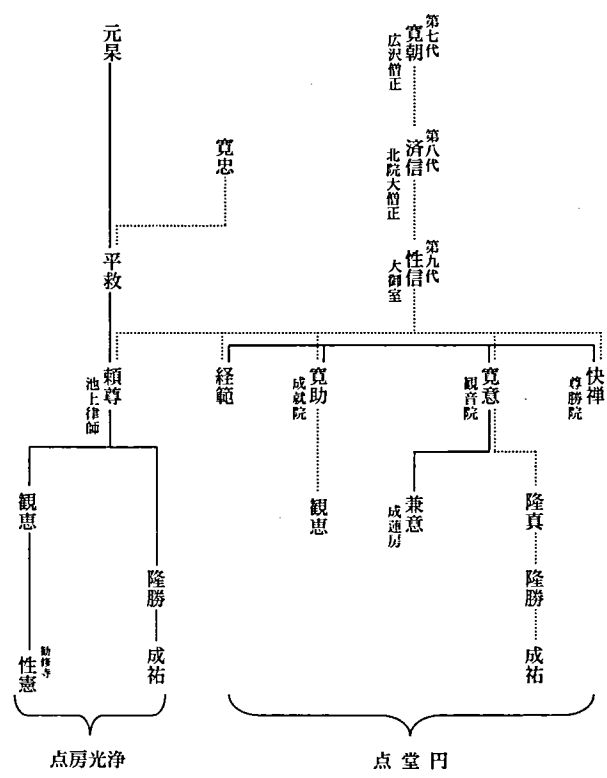
〔円樂寺本(22)〕^(シ)令^セ 彼^レ 散^ス支分^ニ (高山寺藏金剛峯樓閣一切瑜

伽瑜祇經建久九年写本)

(奥書)建久九年九月一日於高雄山以圓樂寺/之本令書寫了

それぞれのヲコト点を用いた僧を、仁和寺の血脉(血脉類集記に
基づき点本の奥書を参照する)によって図示すると次のようになる。

……は灌頂弟子関係 ——は訓誥伝授関係



同じ大御室性信の灌頂弟子でありながら、快禪・寛意・兼意（寛意より伝授）・寛助・経範が円堂点を使って、「令」の再読表現を用いているのに対して、頼尊とその流は浄光房点を使って、「令」を用いている。頼尊とその流における訓読法の伝授は、頼尊が平教の訓読法を受け（23）、平教は元杲から受学したと考えられる（24）。元杲は石山内供淳祐の弟子である。頼尊の訓読法は観恵に伝わっている（25）。

この性信の付法の円堂点使用資料と頼尊の流の浄光房点資料との訓読法の違いは、使役の「令」の訓読法だけでなく、他の事象にも見られる。それを表示すると第一表のようである。

〔第一表〕

| | 頼尊の流の浄光房点資料 | 性信の付法の円堂点資料 |
|----------|------------------|------------------------------|
| 動詞の使役「令」 | 令ラシテ 加点が無く不説 | 令（再読表現） 加点的無いものが多いが一部に「及」 |
| 並列の連詞「及」 | 并 「當」の一度読みが多い | 并 「當」の再読表現が多い |
| 並列の連詞「并」 | 并 「須」を一度読みにする | 并 「須」の再読表現が見られる |
| 陳述副詞「當」 | 「未」を一度読みにする | 「未」の再読表現が見られる |
| 陳述副詞「須」 | 「未」の読添えが無い | 「未」の読添えをするものがある |
| 否定「未」 | | |
| 限定の副詞「唯」 | | |

右の表から知られるように、頼尊の流の浄光房点資料が、並列の連詞「及」を不説にし、「并」を「アハセテ」と訓み、「當」「須」「未」が一度読みを主とするのに対して、寛意・寛助らの性信の付法の円堂点資料では、連詞「及」を「オヨビ」と訓むことがあり、「并」を

後世風に「ナラビニ」と読み、「當」に再読表現が多く、「須」「未」も再読表現が見られる。

これは概して、頼尊の流の浄光房点資料が比較的古い訓読法を伝えているのに対して、性信の付法の円堂点資料は再読表現など新しい訓読法を採っていることを示している。

これを特定の經典で確めると、例えば金剛頂瑜伽護摩儀軌について、平安中期点本（石山寺蔵、禅林寺点）に対する、寛治四年点（仁和寺蔵、僧都（寛意）より奉受）と康和五年点（仁和寺蔵、寛助より奉受）との訓読法の相違に照らし合せると、頼尊の流の浄光房点資料は平安中期点本の訓読法に通ずることが分り、古い訓読法を伝えていることが裏付けられる。次のようである。

(1) 使役「令」を、寛意・寛助が「令」と再読表現にするのに対して、平安中期点本は「令ラシテ」と訓んでいる。

(2) 並列の連詞「及」を、寛意・寛助が「及」と訓んだ例があるのに対して、平安中期点本は全く加点が無く不説と見られる。

(3) 並列の連詞「并」を、寛意・寛助が「并」と訓むのに対して、平安中期点本は古用の「并」と訓んでいる。

(4) 陳述副詞「當」に、寛意・寛助は「當」の再読表現も用いるのに対して、平安中期点本は再読表現が見られない。

以上は、ヲコト点の違いが訓読法の違いと対応する場合である。

これに対して、同じヲコト点を用いても、訓読法に相違のあるものがあり（26）、又、他系統のヲコト点を取入れた結果、訓読法が自流と他流との混合という取合せをなしたものもある。

要するに、ヲコト点と訓読法とは完全に対応するものではなく、

訓読法の変遷の考察にはヲコト点は手掛りにはなるが、訓読法そのものにはそれ独自の分析が必要になるのである。

3. 宗派・流派による訓読語の系統を訓読法の変遷から見る

課題の第三の、訓読法の変遷が宗派・流派と如何に係るかを考察するには、二つの方法がある。第一の方法は、同じ時期における異なる宗派間の訓読法を比較することであり、第二の方法は、同文経典を各宗派が訓読した資料について訓読法を比較することである。訓読法の相違は事象の新古の差に基づいている。

(1) 第一の方法 —— 特定時期(十一世紀初)における異なる宗派間の訓読法の比較

十一世紀初は各宗派の祖点が生まれると考えられる時期である。

この長保(寛弘(九九九—一〇一二)の十年余りの年紀を奥書に持つ訓読資料で、管見に入ったものが十九点ある。これを宗派別に挙げる。(△は本奥書)

(一) 南都古宗

- 1 石山寺藏法華義疏 長保四年 薬師寺僧注算読了 第三群点
- 2 興福寺藏四種相違新纂私記 寛弘七年 東大寺三論宗僧宿倫叟書写了 仮名点

(二) 天台宗三井寺

- 3 △ 東寺金剛藏聖闍曼德迦威怒王立成大神驗念誦法永久二年写本 (本奥書) 長保五年於三井寺唐房、大阿闍梨(慶祚)受已了
- 4 △ 東寺金剛藏甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌永久二年写本 (本奥書) 長保五年於三井寺小堂、奉隨大阿闍梨
- 5 △ 保阪潤治氏藏本大毗盧遮那経広大成就儀軌卷上 (本奥書) 長

保五年三井寺僧仁円上卷了 龍雲坊大阿闍梨伝授行円、陪座下点読之

- 6 △ 東寺金剛藏金剛頂瑜伽降三世成就極深密門永久二年写本 (本奥書) 長保六年於三井寺時永堂、奉隨大阿闍梨承点了

- 7 大東急記念文庫藏金剛頂蓮華部心念誦儀軌 長保六年、文慶が三井大阿闍梨に受学、後受墨点是也(仮名点)

- 8 東寺金剛藏阿闍梨大曼荼羅灌頂儀軌 寛弘五年、永円が三井寺龍雲坊奉点 西墓点

(三) 天台宗比叡山関係(ヲコト点より推定)

- 9 西大寺藏大毗盧遮那成仏経 長保二年朝坐已了 仁都波迦点
- 10 青蓮院吉水藏大毗盧遮那成仏経 長保二年了 仁都波迦点
- 11 東寺金剛藏大日経広大成就儀軌 寛弘四年点重、僧仁本永延三年(九九九)読点 叡山点

- 12 東寺金剛藏胎藏私記 寛弘五年 第一群点

- 13 青蓮院吉水藏胎藏界儀軌卷上 寛弘七年点受、睿超 西墓点

- 14 曼殊院藏金剛頂蓮華部心念誦儀軌 寛弘七年点已了 叡山点

(四) 真言宗小野流カ

- 15 某藏金剛頂経瑜伽修習毗盧遮那三摩地法 寛弘九月六月読了 東大寺点

(五) 真言宗仁和寺

- 16 高山寺藏金剛頂一切如来真実撰大乘現證大教王経 寛弘五年於仁和寺南御室点了 高尾法照闍梨奉受 叡算 西墓点
- 17 高野山学園藏蘇悉地羯羅経 寛弘五年読了南御室伝法 第五群点
- 18 東寺金剛藏不動尊儀軌 寛弘九年書了 星点が喜多院点、線点

は円堂点

19△西大寺蔵大日経蓮華胎蔵悲生曼荼羅広大成儀軌 (本奥書)

長保四年説了 小僧平救

右の十九点のうち、天台宗三井寺の六点はいずれも三井大阿闍梨慶祚の訓説を受学したものであるが、四点は院政期写本に記された本奥書である。当時の訓説法の知られる原本は文慶が長保六年(一〇〇四)に慶祚から受学した金剛頂蓮華部心念誦儀軌と、永円が寛弘五年(一〇〇八)に奉点した阿闍梨大曼荼羅灌頂儀軌の二点である。

天台宗比叡山関係の六点は加點場所や加點僧が殆ど分らずヲコト点から推定したものである。

真言宗小野流かと思られる金剛頂経三摩地法もヲコト点から推定したに過ぎない。

真言宗仁和寺の四点のうち、平救の大日経広大成儀軌は本奥書である。

このような本奥書や推定のもので全卷調査の出来ていないものを除くと、第一の方法の対象としては、南都古宗の法華義疏長保四年(一〇〇二)点と、天台宗三井寺の慶祚の資料と真言宗仁和寺資料の金剛頂一切如来真実撰大乘現證大教王経寛弘五年(一〇〇八)点とが挙げられる。それぞれの奥書は次のようである。

〔南都古宗〕

法華義疏 六卷 石山寺蔵 第三群点(変形)

卷第四 (奥書)〔朱書〕「長保四年(一〇〇二)九月六日於藥師寺傳教院圓

堂點了

沙門注算了聽衆廿餘口也／講師專寺鏡超五師」

〔天台宗三井寺〕

金剛頂蓮華部心念誦儀軌 一帖 大東急記念文庫蔵 西墓点

(奥書)〔墨書〕長保六年(一〇〇四)三月十八廿廿一并四个日

之間受學三井大阿闍梨已了

志同前耳／老僧文慶

年卅八歳廿五 墨点是也

同點觀音院十禪師定暹公之 (追筆) 已上後受

阿闍梨大曼荼羅灌頂儀軌 一卷 東寺觀智院金剛蔵 西墓点

(奥書)〔朱書〕「寛弘五年(一〇〇八)三月十八日三井寺於龍雲房

奉點之／僧永圓記之」

〔真言宗仁和寺〕

金剛頂一切如来真実撰大乘現證大教王経 三卷 高山寺蔵 西墓

点(白点)、円堂点(朱点)

(卷上奥書)〔白書〕「寛弘五年三月廿四日於仁和寺南御室點始

同五日點了／高尾法

〔照〕闍梨奉受了」

(卷下奥書)〔朱書〕「長元八年(一〇三五)十一月十六日於田野御

房點了

傳授師僧都御房也」

右のうち、先ず、天台宗三井寺における慶祚の二資料を見るに、金剛頂蓮華部心念誦儀軌は長保六年に慶祚の弟子の文慶が慶祚から受学した訓説法を墨点で示して、先受の朱点と区別している。阿闍梨大曼荼羅灌頂儀軌は寛弘五年に慶祚の弟子の永円が慶祚から奉点

したものである。この二点本の訓読法は共に慶祚の訓読法を伝えていて大同である。

次に、真言宗仁和寺の当時の訓読法を窺う資料としての金剛頂一切如来真実撰大乘現證大教王經（金剛頂大教王經）は、寛弘五年に仁和寺南御室で叡算が高尾法照園梨から奉受したもので、ヲコト点
は三井寺所用の西墓点を用いている。仮名字体にも西墓点所用の三井寺僧特有の「ㄨ」（キ）、「ㄗ」（ウ）が見られるので、叡算も高尾法照も素姓が未詳であるが、三井寺との関連が考えられる。現に、この訓読法を、天台宗三井寺の慶祚の訓読法と比べると、使役の「令」を「令ラシテ」と訓み、並列の連詞「及」を不読とする等、基本的に共通するものが多い。

この金剛頂大教王經には、寛弘五年から二十七年後の長元八年（一〇三五）に田野御房において僧都御房から伝授され（卷下奥書）、加
点した朱点が全巻にわたって施されている。ヲコト点は仁和寺所用の円堂点であり、「僧都御房」は仁和寺の延尋かとされている（27）。
延尋は仁和寺第八代門跡済信の弟子である。この長元八年の朱点の訓読法が、寛弘五年の白点の訓読法と殆ど一致するので、仁和寺の円堂点の訓読法一流に天台宗三井寺の訓読法が影響したことが考えられる（28）。

この三井寺に関連があり、仁和寺南御室で叡算が奉受した金剛頂大教王經寛弘五年白点の訓読法を、南都古宗の法華義疏長保四年点の訓読法と比較してみる。

法華義疏長保四年点は、同年八月から九月にかけて薬師寺僧の注算が、同寺傳教院円堂において講師の鏡超五師から聴聞して加点したものである。

その使役「令」の訓読法は、

「令ラシテ」

天將脩羅 闘（ハムトスル） 時前 令（マ） 龍（リウ） 與（ト） 之闘（セカハ）（卷一）

687行）

四者欲（シカ） 令（マ） 衆生（シユジヤウ） 尊重（ソウジュウ） 法（ホウ） 故（コ）（卷二125行）

「令ニ」

佛雖（ハ） 不（レ） 須（シ） 請（ス） 而令（シ） 請者獲（ト） 福（トク）（卷四694行）

「令ラ」

又是（シ） 令（マ） 一切衆生作（シ） 佛（ブツ） 之正（シ） 意（イ）（卷二91行）

のように、「令ラシテ」が大多数であるが、極めて少数ながら「令ニ」「令ラ」が用いられている。

使役の「令」の訓法において、使役される者が下の動詞等との間に表記される場合に、三井寺の慶祚や仁和寺南御室で叡算が奉受した金剛頂大教王經寛弘五年白点では、「令ラシテ」だけであるが、法華義疏長保四年点では「令ニ」「令ラ」も見られるのである。

この訓法は、溯って奈良時代の勘経にも見られるもので、奈良時代の勘経ではこの訓法だけであり（29）、平安初頭期もこの訓法が主である。「令ラシテ」は平安初期になって見られるようになるが、平安中期でも、南都の聖語蔵弁中辺論天曆八年（九五四）点では全例が「令ラ」だけであり、南都の学問の影響を受けた石山寺淳祐の弁中辺論延長八年（九三〇）点では、「令ラ」中心の中で一例だけ「令ラシテ」を用いている。これに対して天台宗・真言宗資

料では「令シムヲシテ」中心となり、天台宗比叡山資料には「令シム」の再読表現が少数加わるようになる。

法華義疏長保四年点の「令シムニ」「令シムヲ」は、その奈良時代以来の古い訓法が、この南都古宗の訓読法に少数ながら伝わり残ったと見られる。

このように法華義疏長保四年点が古い訓法を伝存させた結果、金剛頂大教王經寛弘五年点と訓読法を異にした事象は次の第二表の通りである。

〔第二表〕

| | 法華義疏長保四年点 (古用) | 金剛頂大教王經寛弘五年点 |
|---------------------------------|--|--|
| 動詞の使役「令」 後置添詞「者」 (人を表す用法) | 令 <small>シム</small> ヲシテ 者 <small>シム</small> | 令 <small>シム</small> ニ、令 <small>シム</small> ヲ 者 <small>シム</small> |
| 並列の連詞「乃至」 | 乃至 <small>シム</small> 特定の 読添語なし | 乃至 <small>シム</small> 特定の読添語なし |
| 條件の連詞「則」 | 則 <small>シム</small> (不読) | 則 <small>シム</small> |
| 因果の連詞「故」 | 故 <small>シム</small> | 故 <small>シム</small> |
| 添加の連詞「況」 | 況 <small>シム</small> をや | 況 <small>シム</small> をや |
| 否定「未」 | 未 <small>シム</small> | 未 <small>シム</small> |
| 否定「不」の連体形 | 不 <small>シム</small> | 不 <small>シム</small> |
| 読添語の助詞「イ」 | イ(一四例) | イ(二例) |

南都古宗の法華義疏長保四年点の方に、古い訓読法の、「ニ令シム」「ヲ令シム」だけでなく、他にも「者シム」、条件の連詞「則シム」の不読、「故シム」、「況シム」はや、「未シム」の再読表現が無く、「不シム」の連体形に「不シム」が用いられていて、金剛頂大教王經寛弘五年点が新しい訓読法を採っているのと、対照的である。読添語の助詞「イ」も、金剛頂大教王經寛弘五年点が僅かに一例であるのに対して、法華義疏長保四年点は一

四例が数えられる。

この他にも、同じ事象が両資料に無いために比較できないものの、古い訓法が、法華義疏長保四年点の方に見られる事象として次の(1) (4)が挙げられる。

- (1) 並列の連詞「若シム若シム」を不読にする
- (2) 読添語の助詞「ダニモ」「サヘ」を用いる
- (3) 読添語の助動詞「ケリ」を用いる
- (4) 読添語の形式語「ソエニ」「カレ」を用いる

ここからも、南都古宗の法華義疏長保四年点に古い訓読法が伝わっていることが分る。

(2) 第二の方法——同文經典を各宗派が訓読した資料についての

訓読法の比較

第二の方法の、同文經典を異なる宗派が訓読した資料を相互に比較して、その訓読法の違いを見るには、南都古宗と天台宗・真言宗にわたって訓読された資料が望ましい。ここでは南都古宗が所依とし、北嶺でも訓読した、不空羼索神呪心經の古点本を取上げてみる。

この經典では、現存本で加元年時の分るのは西大寺藏寛徳二年(一〇四五)点が最古である。奥書によると、興福寺南円堂で加点し、喜多院点を用いているので南都の資料であることが分る。同じく南都の資料に東寺觀智院金剛藏永長元年(一〇九六)点がある。興福寺僧の深静が加点したもので、喜多院点を用いている。但し永長元年朱点より前に長保(九九九—一〇〇四)頃の褐朱点(細小字)と白点とが施されている。

この南都系の訓読法にも、使役「令シム」に「令シムニ」「令シムヲ」の

古い訓法が、「令ヲシテ」と共に用いられている。

不令⁽²⁾ 暴惡諸鬼神等遊⁽¹⁾ 止其中⁽¹⁾ (西大寺藏寛徳二年点55行)

令⁽²⁾ 彼耳聞⁽¹⁾ (同右、98行)

令⁽²⁾ 彼耳聞⁽¹⁾ (東寺金剛藏永長元年点)

真言宗小野流では、

不⁽¹⁾ 令⁽²⁾ 暴⁽¹⁾ 惡⁽¹⁾ 諸⁽¹⁾ 鬼⁽¹⁾ 神⁽¹⁾ 等⁽¹⁾ 遊⁽¹⁾ 止⁽¹⁾ 其中⁽¹⁾ (醍醐寺藏保□□年移点本55行)

「令ヲシテ」と訓み、天台宗比叡山では、

不⁽¹⁾ 令⁽²⁾ 暴⁽¹⁾ 惡⁽¹⁾ 諸⁽¹⁾ 鬼⁽¹⁾ 神⁽¹⁾ 等⁽¹⁾ 遊⁽¹⁾ 止⁽¹⁾ 其中⁽¹⁾ (書陵部藏院政期点55)

行・宝幢院点)

令⁽²⁾ 彼耳⁽¹⁾ 聞⁽¹⁾ (書陵部藏院政期点98行)

のように再読表現にしている。

他の事象でも、南都の資料には古い訓読法が伝存している。「ヲシテ」や助詞「イ」の読添えである。

或⁽¹⁾ 患⁽¹⁾ 眼⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ 耳⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ 鼻⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ 齒⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ 牙⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ 唇⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ 舌⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ (略)

肩膊⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ (西大寺藏寛徳二年点67行)

或⁽¹⁾ 患⁽¹⁾ 眼⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ 耳⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ 鼻⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ 齒⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ 牙⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ 唇⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ 舌⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ 或⁽¹⁾ 斷⁽¹⁾ 腭⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ 或⁽¹⁾ 心⁽¹⁾ 胃⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾

或⁽¹⁾ 腹⁽¹⁾ 齋⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ (略) 肩膊⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ (東寺金剛藏長保頃謁朱点)

この南都の「ヲシテ」に対して、真言宗小野流では、

或⁽¹⁾ 患⁽¹⁾ 眼⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ 耳⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ 鼻⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ 齒⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ 牙⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ 唇⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ 舌⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ (略)

舌⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ (略) 或⁽¹⁾ 肩⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ 膊⁽¹⁾ 痛⁽¹⁾ (醍醐寺藏保□□年移点本66行)

と音読にしている。他の諸本でも音読が多くて「ヲシテ」は見られない。

助詞「イ」は、次のように

能⁽¹⁾ 令⁽²⁾ 彼⁽¹⁾ 人⁽¹⁾ 怒⁽¹⁾ 己⁽¹⁾ 无⁽¹⁾ 恨⁽¹⁾ (東寺金剛藏永長元年点)

「」の仮名は、同じ興福寺僧の深静が興福寺において五年後の康和三年(一一〇一)に追記したものであり、そこに助詞「イ」が用いられている。助詞「イ」は他の不空羼索神呪心経の諸点本には見られない。

この經典の南都系と真言宗小野流・天台宗比叡山系の訓読法の異なる事象を表示すると、第三表(次頁上段)のようである。

南都系の方に、「者」「并」「故」等の古い訓読法が、右述の「令」

「ニ」「令」「ヲ」「イ」と共に伝わっていることが分る。このようにして、同文諸經典の諸宗派間の訓読法の比較によって、南都古宗だけでなく、真言宗・天台宗の間の宗派・流派の訓読法の差異も知られるようになる。

〔第三表〕

| | 南都系 | 真言宗小野流 | 天台宗 |
|---------------------|------------------------|--------------------------|--------------------------|
| 動詞の使役「令」 | 令ラシテ 令ラシテ 令ニ、令ラ | 令ラシテ 令ラシテ 令ニ | 令ラシテ 令ラシテ 令ニ |
| 後置添置「者」 (人を表す用法) | 者 | 者 | 者 |
| 並列の連詞「并」 | 并 | 并 | 并 |
| 並列の連詞「乃至」 | 乃至 乃至特定の 読添語なし | 乃至 乃至特定の 読添語なし | 乃至 乃至特定の 読添語なし |
| 因果の連詞「故」 | 故 故(序に一例) 将ムトス・ム | 故 故 将ムトス・ム (再読) | 故 故 将ムトス・ム (再読) |
| 陳述副詞「将」 | 将ムトス・ム | 将ムトス・ム (再読) | 将ムトス・ム (再読) |
| 読添語の助詞「イ」 | イ | イ | イ |
| 読添語「ヲミ」 | ヲミ | ヲミ | ヲミ |

4. 訓読法の変遷の全体像の解明に向けて

課題の第四の、訓読法の変遷の全体像の解明のための作業として、次のことが挙げられる。

(1) 訓読法の体系によって、個々の訓点資料の記述を行い、それらを時代別・資料別、更に宗派別に配慮して比較し、時の推移を軸として変遷を叙述する。

(2) 並列の連詞「若」が不読から「モシハ」に変遷したり、「唯願」が「唯願」に変遷したりするのと同じ現象と異なる現象を類別してその全体的な把握をし、その変遷の原理を考察する。

(3) その一つとして、ここでは読添語を取上げる。読添語には変遷しないものと変遷するものがある。変遷しない読添語は日本語の

文章表現の骨格を成すもので、助詞では語と語、句と句との関係を示す格助詞と接続助詞のテ・シテ、バ・トモ・ドモ、用言の陳述に係る係助詞ハ・モ・ヤ・カ、助動詞では叙述の確認・否定・推量など判断を表す指定ナリ・タリ、否定ズ・ジ、推量ム・ベシ、完了ツ・ヌ・タリ・リ、回想キ、及び受身・使役と比況を示すル、シム、ゴトシ、並びに形式語の敬語タマフ・タテマツルやコト・モノ等である。

これに対して、変遷する読添語は、添意性の助詞の副助詞、係助詞のゾ・コソ、終助詞・間投助詞、及び接続助詞ツツ・ナガラ・カラニ、助動詞では推量マシ・ラム・ケム、回想ケリ、形式語ソエニ・ヲミ等である。

この変遷する読添語は、平安初期には多寡の差はあるものの使用されたが、平安中期以降は、全く使用例を見なくなるものと、或種の資料には用いられて宗派や資料の差を作るものがある。

この宗派や資料による差を作りつつ平安中期以降も用いられた主なものを取上げてみる。

その中で象徴的なのが、助詞「イ」である。助詞「イ」は、山田孝雄博士が因明関係の經典には後世も使用されていたことを指摘されて(30)以来、平安初期訓点本の使用だけでないことが印象づけられたが、平安時代における使用の実態は必ずしも明らかではなかった。

この度刊行された築島裕博士の畢生の力作「訓点語彙集成」全八巻は、平安時代の読添語の実態を知るにも重要な手掛りを与えてくれる。これに基づき若干を補った上で、平安時代の仏書における助詞「イ」の使用状況を纏めると、次の①〜⑧のようなことが

分つて来た。

(4) 助詞「イ」の使用状況は凡そ以下のようである。

① 助詞「イ」は、奈良時代の訓読の用法を受けて、平安初期には殆どの訓点資料で主語を明示することを主な働きとして使われている。

② 平安中期以降も、南都古宗では院政期に至っても助詞「イ」が使われている。但し南都古宗でも平安後期以降は「イ」の使用例のない資料もある(例、西大寺蔵不空絹索神呪心經寛徳二年(一〇四五)点、立本寺蔵妙法蓮華經寛治元年(一〇八七)点)。

③ 平安中期には、天台宗三井寺でも比叡山でも、真言宗小野流でも、助詞「イ」が用いられている。但し南都古宗に比べて用例数は少なく、一〜三例程度である。

④ 平安中期には、経疏だけでなく儀軌にも用いられる。金剛頂蓮華部心念誦儀軌では、東寺観智院金剛蔵平安中期点に用いられた助詞「イ」が三井寺の倫普説(永延元年(九八九))と慶祚(長保六年(一一〇四))とから文慶が受学した時には、「イ」は用いられなくなっている。慶祚の訓読法は祖点として三井寺に伝えられたから、慶祚の流では「イ」を用いていない。

同様に、金剛頂大教王経で、高山寺蔵寛弘五年(一一〇八)点に用いられた「イ」が、同経を長元八年(一一三五)に仁和寺で伝授された円堂点の訓読では用いられなくなっている。

⑤ 南都古宗所依の經典を天台宗の僧が訓読する時に、当該經典に南都で用いた「イ」が使われることがある。その場合、南都古宗に比べて数量は少ない(例、吉水蔵成唯識論、金剛三昧院蔵本唯識義章)。

⑥ 特定の経疏には、宗派を越えて助詞「イ」を用いたものがある。特に大毗盧遮那成仏経疏の諸点本では真言宗の小野流・広沢流にわたって「イ」が用いられている。

又、蘇悉地羯羅経では天台宗三井寺・比叡山、真言宗小野流・広沢流にわたって「イ」が見られ、金光明最勝王経、大乘本生心地観経にも使用例がある。

⑦ 特定の伝記や旅行記にも助詞「イ」を用いたものがある。南海寄帰内法伝、大慈恩寺三蔵法師伝、大唐西域記である。

⑧ 三教指帰注集のように、平安時代の本邦の僧による撰述書に若干の「イ」を用いたものがある。

(5) 平安中期以降も一部には用いられる説添語の主な九語を第四表に一覧する。九語を用いた訓点資料六十四点を表には①〜④の番号で示し、その各資料は第四表の後に掲げた31。この作業は、助詞「イ」と同じく築島裕博士の労作『訓点語彙集成』に基づき若干を補加したもので、平安時代における使用の大勢は窺い知ることが出来ると思う。

助詞「イ」から知られるように、これらの説添語は、平安初期に用いられた古い用法が伝存したものであり、その多くは、それ自体の変遷を反映させずに平安初期の用法のままに使い伝えていく。

これらの説添語からも窺われるように、平安時代の仏書の訓読法は、或る時期に一拠に新しいものに定着するのではなく、新と古とを、宗派や資料によって混ぜ合せながら、徐々に新しい訓読法に向って行く姿として把えることが出来そうである。

〔助詞ツツ〕

- ① 東大寺図書館蔵法華論義抄平安中期点
 - ② 石山寺蔵成唯識論寛仁四年(一一二〇)点(東大寺平能)
 - ③ 石山寺旧蔵(春日和男博士蔵)金光明最勝王經平安後期点(東大寺点)
 - ④ 立本寺蔵妙法蓮華經寛治元年(一一〇八七)点(興福寺經朝)
 - ⑤ 石山寺蔵妙法蓮華經玄贊卷第六平安中期点(淳祐)
 - ⑥ 東大寺図書館蔵法華文句平安後期点(天台僧堯円)
 - ⑦ 青蓮院吉水蔵結護念誦法大治三年(一一二八)点(仁都波迦点)
 - ⑧ 東京大学国語研究室蔵大毗盧遮那成仏經疏永久二年(一一一四)点(円堂点)
 - ⑨ 東寺觀智院金剛蔵大毗盧遮那成仏經疏永久四年(一一一六)点(円堂点)
 - ⑩ 醍醐寺蔵大毗盧遮那成仏經疏元暦二年(一一八五)点(円堂点)
 - ⑪ 興聖寺蔵大唐西域記卷第十二平安中期点(第四群点)
 - ⑫ 石山寺蔵大唐西域記長寛元年(一一六三)点(東大寺点)
 - ⑬ 法隆寺・国会図書館蔵大慈恩寺三蔵法師傳天治三年(一一二六)点(覚印)
- 〔助動詞ケリ〕
- ⑭ 石山寺蔵法華義疏長保四年(一一〇二)点(薬師寺注算)
 - ⑮ 石山寺旧蔵(春日和男博士蔵)金光明最勝王經平安後期点(東大寺点)
 - ⑯ 真福寺蔵妙法蓮華經優婆提舍治暦四年(一一〇六八)点
 - ⑰ 立本寺蔵妙法蓮華經寛治元年(一一〇八七)点(興福寺經朝)
 - ⑱ 東大寺図書館蔵因明論疏四相違略注釈卷上中下天永四年(一一一

三)点(東大寺点)

- ⑰ 東大寺図書館蔵因明義草仁安四年(一一六九)点(仮名点)
 - ⑱ 佐藤正憲氏蔵菩薩投身施餓虎經院政期点(喜多院点)
 - ⑳ 石山寺蔵妙法蓮華經玄贊卷第六平安中期点(淳祐)
 - ㉑ 東大寺図書館蔵法華文句平安後期点(天台僧堯円)
 - ㉒ 東寺觀智院金剛蔵蘇磨呼童子請問經卷上院政期点(天尔波留点別流)
 - ㉓ 龍光院蔵妙法蓮華經平安後期点(明算、中院僧正点)
 - ㉔ 金沢文庫蔵金剛頂蓮華部心念誦次第天承元年(一一三一)点(円堂点)
 - ㉕ 東京大学国語研究室蔵大毗盧遮那成仏經疏永久二年(一一一四)点(円堂点)
 - ㉖ 東寺觀智院金剛蔵大毗盧遮那成仏經疏永久四年(一一一六)点(円堂点)
 - ㉗ 醍醐寺蔵大毗盧遮那成仏經疏元暦二年(一一八五)点(円堂点)
 - ㉘ 仁和寺蔵大毗盧遮那成仏經疏寛治七年(一一〇九三)・嘉保二年(一一九五)点(寛意奉受、円堂点)
 - ㉙ 醍醐寺蔵大毗盧遮那成仏經疏大治五年(一一三〇)点(浄光房点)
 - ㉚ 石山寺蔵大唐西域記長寛元年(一一六三)点(東大寺点)
 - ㉛ 最明寺蔵往生要集平安後期点(宝幢院点)
- 〔助詞バカリ(程度)〕
- ㉜ 東大寺図書館蔵大般涅槃經平安後期点(觀覺寺伝法、東大寺点)
 - ㉝ 佐藤正憲氏蔵菩薩投身施餓虎經院政期点(喜多院点)
 - ㉞ 石山寺蔵不動念誦次第長暦元年(一一〇三七)点(宝幢院点)
 - ㉟ 金剛三昧院蔵守護經鈔本院政期点(円堂点)

- ⑳ 高山寺藏大毗盧遮那成仏經疏永保二年(一〇八二)点(東大寺点)
- ㉑ 東寺觀智院金剛藏大毗盧遮那成仏經疏永久四年(一一一六)点(円堂点)
- ㉒ 東京大学史料編纂所藏大毗盧遮那成仏經疏卷第二十康和四年(一一〇二)点(宝幢院点)
- ㉓ 高山寺藏大毗盧遮那成仏經疏康和五年(一一〇三)点(中院僧正点)
- ㉔ 醍醐寺藏大毗盧遮那成仏經疏大治五年(一一三〇)点(淨光房点)
- ㉕ 興聖寺藏大唐西域記卷第十二平安中期点(第四群点)
- ㉖ 石山寺藏大唐西域記長寬元年(一一六三)点(東大寺点)
- ㉗ 興福寺藏高僧伝卷第十三康和二年(一一〇〇)点(喜多院点)
- ㉘ 天理図書館藏南海寄帰内法伝平安後期点(天台僧成禪、宝幢院点)
- ㉙ 法隆寺藏南海寄帰内法伝大治三年(一一二八)点(仮名点)
- ㉚ 興福寺藏大慈恩寺三藏法師伝承徳三年(一〇九九)点(仮名点)
- ㉛ 興福寺藏大慈恩寺三藏法師伝永久四年(一一一六)点(仮名点)
- ㉜ 東寺觀智院金剛藏唐大和上東征伝院政期点(仮名点)
- ㉝ 東大寺図書館藏新修往生伝下保元三年(一一五八)点(古紀伝点)
- ㉞ 最明寺藏往生要集平安後期点(宝幢院点)
- ㉟ 大谷大学藏三教指帰注集長承三年(一一三四)点(円堂点)
- ㊱ 天理図書館藏三教指帰久寿二年(一一五五)点(古紀伝点)
- ㊲ 仁和寺藏医心方院政期点(古紀伝点)
- ㊳ 天理図書館藏日本極楽往生記応徳三年(一一八六)点(仮名点)
- ㊴ [助詞ダニ(ダモ)]
- ㊵ 石山寺藏法華義疏長保四年(一一〇二)点(薬師寺注算)

- ㊶ 石山寺藏成唯識論寬仁四年(一一二〇)点(東大寺平能)
- ㊷ 石山寺旧藏(春日和男博士藏)金光明最勝王經平安後期点(東大寺点)
- ㊸ 立本寺藏妙法蓮華經寬治元年(一一〇七)点(興福寺經朝)
- ㊹ 東大寺図書館藏大般涅槃經平安後期点(觀覺寺伝法、東大寺点)
- ㊺ 東大寺図書館藏法華經二十八品略釈下延久二年(一一七〇)点(第五群点)
- ㊻ 五島美術館藏大毗盧遮那經卷第一平安中期角筆点(慈覺大師点)
- ㊼ 石山寺藏菩薩戒經長和五年(一一〇一)点(天台宗比叡山僧成禪が興福寺にて伝説、宝幢院点)
- ㊽ 五島美術館藏妙法蓮華經卷第五平安後期点(西墓点)
- ㊾ 龍光院藏妙法蓮華經平安後期点(明算、中院僧正点)
- ㊿ 書陵部藏妙法蓮華經平安後期点(禪林寺点)
- ㊱ 高野山学園藏蘇悉地羯羅經承保元年(一一七四)点(明算↓寬智、円堂点)
- ㊲ 高山寺藏大毗盧遮那成仏經疏永保二年(一〇八二)点(東大寺点)
- ㊳ 東京大学国語研究室藏大毗盧遮那成仏經疏永久二年(一一一四)点(円堂点)
- ㊴ 東寺觀智院金剛藏大毗盧遮那成仏經疏永久四年(一一一六)点(円堂点)
- ㊵ 醍醐寺藏大毗盧遮那成仏經疏元暦二年(一一八五)点(円堂点)
- ㊶ 東京大学国語研究室藏大毗盧遮那成仏經疏治安四年(一一二四)点(西墓点)
- ㊷ 東寺觀智院金剛藏大毗盧遮那成仏經疏卷第二延久二年(一一七〇)点(宝幢院点)

⑤① 日光輪王寺藏大毗盧遮那成仏経疏仁平元年(一一五二)点(宝幢院点)

⑤② 石山寺藏大唐西域記長寛元年(一一六三)点(東大寺点)

⑤③ 法隆寺藏南海寄帰内法伝大治三年(一一二八)点(仮名点)

⑤④ 興福寺藏大慈恩寺三蔵法師伝永久四年(一一一六)点(仮名点)

⑤⑤ 最明寺藏往生要集平安後期点(宝幢院点)

⑤⑥ 大谷大学蔵三教指帰注集長承三年(一一三四)点(円堂点)

〔助詞コソ〕

⑤⑦ 小川本(国蔵)大乘掌珍論天曆九年(九五五)点(東大寺觀理)

⑤⑧ 石山寺藏成唯識論寛仁四年(一一二〇)点(東大寺平能)

⑤⑨ 東大寺図書館蔵因明義草仁安四年(一一六九)点(仮名点)

⑤⑩ 東京大学国語研究室蔵大毗盧遮那成仏経疏永久二年(一一一四)点(円堂点)

⑤⑪ 東寺觀智院金剛蔵大毗盧遮那成仏経疏永久四年(一一一六)点(円堂点)

〔助詞サヘ〕

⑤⑫ 醍醐寺蔵大毗盧遮那成仏経疏大治五年(一一三〇)点(浄光房点)

〔助詞サヘ〕

⑤⑬ 石山寺蔵法華義疏長保四年(一一〇二)点(葉師寺注算)

⑤⑭ 東大寺図書館蔵因明義草仁安四年(一一六九)点(仮名点)

⑤⑮ 石山寺蔵辯中辺論延長八年(九三〇)点(淳祐)

⑤⑯ 石山寺蔵大唐西域記長寛元年(一一六三)点(東大寺点)

⑤⑰ 興福寺蔵大慈恩寺三蔵法師伝永久四年(一一一六)点(仮名点)

〔助動詞ラム〕

⑤⑱ 知恩院蔵地蔵十輪経卷第十平安中期点(第五群点)

⑤⑲ 東大寺図書館蔵大般涅槃經平安後期点(觀覺寺伝法、東大寺点)

⑤⑳ 最明寺藏往生要集平安後期点(宝幢院点)

⑤㉑ 慶応義塾図書館蔵大毗盧遮那経卷第一康平七年(一一六四)点(第一群点)

〔助動詞ケム〕

⑤㉒ 大東急記念文庫蔵大日経義积演密鈔長承三年(一一三五)点(喜多院点、中川成身院本)

⑤㉓ 東寺觀智院金剛蔵大毗盧遮那成仏経疏永久四年(一一一六)点(円堂点)

〔助詞ナガラ(連用形に付く)〕

⑤㉔ 高山寺蔵大毗盧遮那成仏経疏長治二年(一一〇五)点(仮名点)

⑤㉕ 醍醐寺蔵大毗盧遮那成仏経疏大治五年(一一三〇)点(浄光房点)

⑤㉖ 興福寺蔵大慈恩寺三蔵法師伝永久四年(一一一六)点(仮名点)

⑤㉗ 大谷大学蔵三教指帰注集長承三年(一一三四)点(円堂点)

⑤㉘ 書陵部蔵文鏡秘府論保延四年(一一三八)点(円堂点)

⑤㉙ 最明寺藏往生要集院政中期点(仮名点)

〔助詞ナガラ(連用形に付く)〕

⑤㉚ 東寺觀智院金剛蔵虚空蔵求聞持法長元八年(一一三五)点(西墓点)

⑤㉛ 青蓮院吉水蔵阿弥陀儀軌永久二年(一一一四)点(仁都波迦点)

⑤㉜ 東寺觀智院金剛蔵仏説陀羅尼集經久安二年(一一四六)点(西墓点)

⑤㉝ 東寺觀智院金剛蔵大毗盧遮那成仏経疏卷第二延久二年(一一〇七)点(宝幢院点)

⑤㉞ 醍醐寺蔵大毗盧遮那成仏経疏大治五年(一一三〇)点(浄光房点)

⑤㉟ 石山寺蔵大唐西域記長寛元年(一一六三)点(東大寺点)

⑤㊱ 前田育徳会蔵冥報記長治二年(一一〇五)点(喜多院点)

- ⑥4 来迎院藏靈異記院政期点
 ⑥5 東寺觀智院金剛藏唐大和上東征伝院政期点 (仮名点)
 ⑥7 東大寺図書館藏新修往生伝下保元三年(一一五八)点 (古紀伝点
 カ)
 ⑥8 大谷大学藏三教指帰注集長承三年(一一三四)点 (円堂点)
 ④0 仁和寺藏医心方院政期点 (古紀伝点)
 ⑥7 書陵部藏文鏡秘府論保延四年(一一三八)点 (円堂点)
 ⑥8 最明寺藏往生要集院政中期点 (仮名点)
 ⑥9 高山寺藏三教指帰卷中院政初期点 (仮名点)

注

- (1) 大坪併治『訓点語の研究』(昭和三十六年三月)、
 同『平安時代における訓点語の文法』(昭和五十六年八月)等。
 (2) 春日政治西大『寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究 研究篇』
 (昭和十七年十二月)。
 (3) 中田祝夫『古点本の国語学的研究 総論篇』(昭和二十九年五月)。
 (4) 築島裕『平安時代訓点本論考 ヲコト点因 仮名字体表』(昭和六十一年十月)。
 同『平安時代訓点本論考 研究篇』(平成八年五月)。
 (5) 拙稿「神田本白氏文集の訓の類別」(『国語と国文学』第四
 十卷第一号)。後に拙著『平安鎌倉 時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』
 (昭和四十二年三月)に収載。
 (6) 築島裕「成唯識論の古訓法について」(『国語と国文学』第
 四十六卷第十号、昭和四十四年十月)。同「平安時代の古訓

- 点の語彙の性格―大日経の古訓法を例として―」(『国語学』第
 八十七集、昭和四十六年十二月)。同「大日経疏の古訓法に
 ついて」(『五味智英先生 古稀記念上代文学論叢』昭和五十二年十一月)。
 築島裕『平安時代訓点本論考 研究篇』に「成唯識論の古訓
 法の伝流」「大日経の古訓法の伝流」「大日経疏の古訓法の
 伝流」として所収。
 三保忠夫「蘇悉地経古点の訓読法」(『国語学』第一〇二集、
 昭和五十年九月)。
 (7) 松本光隆『平安鎌倉時代漢文訓読語史料論』(平成十九年二
 月)。
 (8) 拙稿「漢文訓読史上の一問題―再読字の成立について―」(『国
 語学』第十六輯、昭和二十九年三月)。
 (9) 拙稿「及字の訓読」(『国文学言語と文芸』第四号、昭和三十
 四年五月)。同「博士読みの源流―トキンバ(則)を例とし
 て―」(『国文学言語と文芸』第十五号、昭和三十六年三月)。
 同「らくのみ」「まくのみ」源流考」(『文学論藻』第八号、
 昭和三十二年十月)。同「古点の況字統貂」(『東洋大学紀要』
 第十二集、昭和三十三年二月)等。
 (10) 門前正彦「漢文訓読史上の一問題―「ヒト」より「モノ」「ヘー」
 (『訓点語と訓点資料』第十一輯、昭和三十四年三月)。同
 「漢文訓読史上の一問題(四)―「井」字の訓について―」(『訓点
 語と訓点資料』第十四輯、昭和三十五年十月)。同「漢文訓
 読史上の一問題(五)―「欲」字の訓について―」(『訓点語と訓点
 資料』第二十五輯、昭和三十八年三月)等。
 (11) 拙稿「漢文訓読史研究の一試論」(『国語学』第五十五輯、

- 昭和三十八年十二月)。同「唐代説話の翻訳―金剛般若經集驗記」について―(『日本の説話』第七卷、昭和四十九年十一月)。同「訓読法の変遷―平安時代の妙法蓮華經の古点本を例として―」(『漢文教育の理論と指導』昭和四十七年二月)。
- 同「字訓の変遷―観弥勒上生兜率天経贊古点を例として―」(『漢字と日本語』漢字講座3、昭和六十二年十一月)。
- (12) 拙著『角筆文献研究導論』上巻 東アジア篇(二〇〇四年七月)。
拙稿「奈良時代の角筆訓点から観た華嚴經の講説」(『論集 東大寺創建前後』(ザ・グレイトブツダ・シンポジウム論集 第二号)、平成十六年十二月)。同「日本の訓点の一流流」(『汲古』第四十九号、平成十八年六月)。同「日本語訓点表記としての白点・朱点の始原」(『汲古』第五十三号、平成二十年六月)。
- (13) 拙稿「角筆による新羅語加点の華嚴經」(『南都仏教』第九十一号、平成二十年十二月)。同「日本の經典訓読の一流流―助詞イを手掛りに―」(『汲古』第五十五号、平成二十一年六月)。
- (14) 主に牛島徳次『漢語文法論』(古代篇、中古篇)に拠っている。
- (15) 注(14)文献の「古代篇」に史記の「唯上察之」を挙げて祈願を表す動詞としている。
- (16) 石山寺藏平安中期点(淳祐加点)では「唯者敬諾之辞」と訓んでいる。
- (17) 西大寺本金光明最勝王経平安初期点は、すべて「唯願」と「唯」には「リ」だけが施されていて、これを春日政治博
- 士は「唯願」と訓み、地藏十輪経元慶七年(八八三)点の「唯願」を中田祝夫博士の訳文篇でも「唯願」と補読している。
- (18) 注(3)文献、三九一・四三〇頁、並びに注(4)文献研究篇七七三・八三四頁。
- (19) この「僧都」を、注(4)文献(七八四頁)で観音院僧都寛意(一〇五四―一一〇一)に宛てている。
- (20) 成蓮房は血脈類集記第五に、寛意の弟子で大法師兼意が成蓮房と号したとある。
- (21) 実寛(一〇八〇―一一一〇)は寛助の灌頂弟子である(血脈類集記第四)。実寛が奉受した仁和寺藏金剛頂瑜伽護摩儀軌康和五年点は、本奥書によると正暦二年(九九一)に寛朝の弟子の清寿が大師大僧正(寛朝)から伝授された訓読法を伝えていて、同じ仁和寺藏金剛頂瑜伽護摩儀軌で寛治四年に僧都(寛意)から奉受した本の訓読法と殆ど一致している(拙稿「仁和寺藏金剛頂瑜伽護摩儀軌二本の訓点―金剛頂瑜伽護摩儀軌の訓読史よりの考察―」(『訓点語と訓点資料』第八十八輯、平成四年三月)。
- (22) 円楽寺は仁和寺の塔頭の一つで、仁海僧正の灌頂弟子の成典が建立し、観恵・親覚等が継いだ。ヲト点はすべて浄光房点を用い、観恵の写点本を勧修寺の性憲が建久年間に写したものが主となっている。観恵は頼尊の受学本を門弟に書写させている(西大寺藏大日経広大成就儀軌、「古点本の国語学的研究」(総論篇)による)。
- (23) 頼尊が平教から受学したことは次の奥書で知られる。

○東寺觀智院金剛藏大毗盧遮那成仏神變加持經蓮華胎藏悲生

曼荼羅廣大成就儀軌卷上、卷下 延文元年写本

(卷下奥書) 件寫本被記云／長保四年(一〇〇二)九月六日

讀了小僧平救

興隆御
房御傳

萬壽三年(一〇二六)二月十六日讀了於神應之

／根本度唐本

長元五年(一〇三二)六月二日於木寺受了頼尊

(以下略)

○西大寺藏大日經蓮華胎藏悲生曼荼羅廣大成就儀軌

(奥書) 長保四年九月六日讀了 小僧平救

興隆御
房御傳

萬壽三年二月十六日讀了於神護之根本^(一〇二六)度唐本

長元五年六月二日於本寺受了 頼尊

右大法者上下兩卷是池上故平救園梨之被傳本也

被園梨再受之由被記之 續即被授律師

律師亦令被授之 尤可貴重而觀惠爲其門弟書寫

仁平四年三月廿九日奉受了 佛子聖譽

(中田祝夫「古点本の国語学的研究 総論篇」改訂版)

西大寺藏の奥書には「續即被授律師」とある。

(24) 平救が元杲から受学したと考えられるのは次による。石山

寺藏孔雀明王畫像壇場儀軌一帖(校倉聖教十三函19号)康

平二年(一〇五九)写本に、

(奥書) 康平二年八月一日書了

(別筆)「遇池上律師傳受了 又移點他本了」

とあり、康平二年頃の朱点(仮名、ヲコト点・宝幢院点)

に対して異なる訓点を別墨点で施している。この別墨の仮名には「て(ニ)」「小(ナ)」のような石山内供淳祐とその

流(元杲)が用いた特異な字体が見られる。池上律師頼尊

は平救の訓読を伝えていて、平救が元杲の付法弟子(血脈

類集記第三)であることからすれば、特異な仮名字体は元

杲から平救を経て頼尊に伝わったと考えられる。

(25) 頼尊の訓法が觀惠に伝わったことは、注(23)の西大寺藏

本の奥書に「律師亦令被授之 尤可貴重而觀惠爲其門弟書

寫」とあるので知られる。

(26) 例えば天台宗三井寺において、慶祚の祖点が二代三代の孫

弟子に伝わる間に、ヲコト点は同じ西墓点であるが、訓読

法が一部変改する。即ち、慶祚が並列の連詞「及」を不説

にし、「當^{マサニ}」の再読表現を一部に用いるのに対して、孫弟

子の中には「及^{オホヒ}」や「當^{マサニ}」の積極的使用が見られる。

又、南都の法相宗においても妙法蓮華經の訓読に共に喜多

院点を用いるが、法隆寺藏卷第三の長保(九九九—一〇〇

四)頃点が「當」「宜」を再読表現にしないのに対して、立

本寺藏本に伝えられた興福寺僧の珣照(一〇三一年二十六

歳)の訓読法を寛治元年(一〇八七)に同じ興福寺僧の經

朝が移点した白点では、「當」は殆ど再読表現にし、「宜」

も再読表現にしている。

(27) 注(4)文献、研究篇七七七頁。高野山学園藏金剛頂大教

王經三卷の奥書に、

(卷第三奥書)(朱書)「長元六年七月廿二日於大師僧都御房

奉受了／比丘濟延」

とあり、濟延（一〇二一—一〇七一）は仁和寺の観音院僧都延尋（九九二—一〇四九）の弟子であるから、高山寺藏金剛頂大教王經の「僧都御房」も延尋の可能性が大きい。

- (28) 東寺観智院金剛藏造塔延命功德經（一一三箱7号）は、長和四年（一〇一五）に朝聖が上定坊で奉読受したもので、朱書の仮名とヲコト点（西墓点）が施されている。上定坊は、唐院阿闍梨興慶で、心誓の弟子である。心誓は慶祚の資である。

この点本は、一三〇年後の天養元年（一一四四）に仁和寺の相応院に伝わったことが、後筆墨書奥書で知られる。相応院は寛助（一〇五二—一一二五）の弟子の世豪から能覚が仁平二年（一一五二）に受法している。天養元年の墨書による加点は仮名とヲコト点に円堂点を用いている。この墨書加点の訓読法は基本的に西墓点の朱点の訓読法を踏襲して、一部に異訓法を採るに過ぎないから、やはり三井寺の訓読法の影響が仁和寺に及んだことが知られる。

- (29) 拙稿「日本の經典訓読の一流流―助詞イを手掛りに―」（『汲古』第五十五号、平成二十一年六月）。

- (30) 山田孝雄『奈良朝文法史』（一九二三年刊）三二一頁。

- (31) 天台宗の平安中期点のうち、石山寺藏沙弥十戒威儀經平安中期点は口頭語的要素が存し、石山寺藏仏説太子須陀摩經平安中期末点は和文的要素が入っているので、除いた。

「こばやし よしのり、広島大学名誉教授」
 （平成二十一年五月二十四日、第一〇〇回記念講演）